「多言語都市・上海」を思う・続
（『日録』2018年7月～8月より）

西　成彦

Saturday

大橋毅彦さん（1955-　）は，『言語都市・上海 1840-1945』（和田博文・大橋毅彦・真鍋正宏・竹松良明・和田桂子著，藤原書店，1999）の編者のひとりでもいらっしゃったが，その新刊『昭和文学の上海体験』（勉誠出版，2017）は，〔補注：後に『D・L・ブロッホをめぐる旅』（春陽堂書店，2021）へと発展することになった〕神戸・ユダヤ文化研究会とのコラボを通して構想が膨らんだというユダヤ系ドイツ人の画家，D・L・ブロッホ（1910-2002；上海滞在期間は1940-49；人力車を描いた水彩や木版画が有名⇒写真）に関する日本初の本格的な研究（第十二章，第十三章）もさることながら，「第十一章：〈マラーネ〉ゲルハルトの赤い舌」なども，堀田善衛（1918-98）の『祖国喪失』（1952）に登場する謎のユダヤ人の影を追いかけた，これもスリリングな論考である。

しかし，ここでは，「第八章：明朗上海に刺さった小さな棘」に取り上げられている池田みち子（1910-2008）の「上海小説」に触れておこうと思う。

思えば，『言語都市・上海 1840-1945』に男性作家の上海への網羅的な言及はあっても，女性のそれへの言及は皆無に等しかった。林京子（1930-2017）のような戦後作家にページが割かれないのはやむをえなかったとしても，池田みち子の名前がないのは，一時は「女・田村泰次郎」とまで呼ばれた池田に対する評価が，ずっと安定しないままであったことにも起因するのかもしれない。同僚の中川成美さん（1951-　）から幾度となくその名を聞かされてきた私からすれば不当だとしか思えないのだが，いずれにしても，その池田みち子にとって，戦時下上海での「フィールドワーク」は，その後の作家生活のなかでも重要な意味を持ったように思うのである。《池田みち子の小説では〔中略〕日本人コミュニティの中に定住しない者が多く描かれて》（p. 207）おり，主人公の女性が関わりを持つ男性は，かたや主人公の《従兄にはあたるが，母親は中国人だと紹介される青年》（「上海」，『三田文学』1940年5月号）であったりもするが，他方では，《ルーマニヤ人の父親とチェッコスロヴァキア人母親のあいだに生まれた青年》（「上海にて」，『三田文学』1940年11月号）や，《スラブ民族の血が流れている〔中略〕男》（「上海の片隅」，『三田文学』1941年5月号）など，さまざまである。したがって，作品は，おのずと女性の体を張った潜入ルポとも呼びたくなるような色彩を強めるのだが，これらの話のどこまでが実話だったかを詮索しても意味はない。

むしろ，ここでは，所詮「内地人」でしかない女主人公が，いかにも多国籍都市ならではと思わせる上海でつながりを持つ男たちのカタログ的な「バラエティ」に目を向けておこう。

「上海にて」で主人公が腐れ縁を解消しようと躍起になっている《ごろつきのルーマニヤ人》

(『三田文学』1940 年 11 月号，p. 82）のレオポルドは，《母親と二人でハルビンで大きくなつた》(p。88）こともあり，そこそこ日本語ができる。だから，主人公が男と住むために部屋を借りていた《ダンスホールやデパートの階上で〔中略〕支那人の女を買ひにくる，日本人の男にときたま出會》うと，《あゝこれは日本人だな，と氣付くのは，私よりもレオポルドの方がはやく，それまで日本語で話してゐたのを，急に英語にかへてしま》(p. 83）ったりと，ハラハラするような上海生活を送っている。

しかし，相手は，なまじ日本語ができるとは言っても「内地人」を相手にするのと同じではない。

《私には〔中略〕デリケートな思考を英語で伝へるだけの語学の力がなかったし，日本語で話すには，幾つも接続詞や副詞を使はねばならず，それでは彼に理解できないに決まつてゐる。》(p. 87）

そんな「言語的な不自由」を介してつながる二人は，なかなか長続きしない。

他方，「上海の片隅」で主人公が関係を断とうとしてもがき苦しむ「スラブ民族の血が流れてゐる男」の場合は，日本語ができない設定だ。そして，それが同じく二人の関係を不安定なものに変えていくのだが，物事は単純ではない。

> オルギンが若し日本語をわかつてさへくれたら，あんな〔中略〕暮らしかたへ，私はだまつてゐられなくて，いつも諍ひはたえなかつただらう，さういふ絶え間のない諍ひは，却て私たちをもつと早く別れさしたのかも知れないけど，言葉の不自由な男から，ただただものやさしく取扱はれてゐると〔中略〕そのものやさしさになごむ身のこなしをいつまでもつづけてゐたのであつた。(『三田文学』1941 年 5 月号，p. 117）

それこそ，敗戦後の「内地」で日本の女性が GI とのあいだに結んだ「言語的な不自由」と「ものやさしさになごむ身のこなし」との合わさりを，池田は上海で先取りしつつ，それまでの男による「上海小説」にはなかった「上海情緒」として世に問うていたのだった。

ただ「勝者としての米兵」に近づいて行った女たちと，「故国への情」にすがりつくこともできない「ごろつき」(「ルーマニヤ人」や「スラブの男」）へと好き好んでなびいていった池田の女主人公たちを単純に等号で結んでもいいものか，そこはどうしたものだろう。

《上海に住む日本人のひとりびとりが，日本の国威で守られてゐるやう》なのに対し，《ルーマニヤから保護されてはゐない》し，《まるで故国を愛さうとしない》(前掲「上海にて」pp. 84-5）男に魅かれていってしまう，それが池田の思い描いた「上海病」だったのか？

「日本女性」が「日本女性」をやめてしまうような境地を描くかに見せかけながら，最終的には「日本女性」以外の何者でもありえない女性を描くことで，「国民文学」に奉仕したのが，池田みち子の「上海小説」だった。

そしてその主人公たちにとって「日本語圏」の「内と外」がせめぎ合う「汽水域」のような場所こそが，恋愛のために用意された選り抜きの場所だった。

Tuesday

上海のユダヤ人と日本人の接触に関しては，「上海二世」（『三田文学』1941 年 11 月号）のなかに，《楊樹浦のバラツクのやうな猶太人のアパートの屋根裏にゐた》時代に，《ドイツを追はれて間のないユダヤ人の夫婦》の《妻君》から，中国人の「ボーイ」を雇うくらいなら自分を雇えと言われ，最初は《こんなにゆきとどいた女中は滅多に見つかるものではないと感心》するのだが，《十日間もすぎると〔中略〕ゆきとどいた猶太人の神経に負けてしま》い，その几帳面さが煩わしくなって，そこを出るという，妙に生々しいエピソードが書かれている。

日本人が，ユダヤ人とはいえ，ヨーロッパ人を「女中」に使っているというエピソードは，いかにも 1941 年の上海らしい気もするが，「上海二世」という作品は，上海生まれの「村山」という日本人のメンタリティに照準を当てた作品なので，ユダヤ人の話は，作品全体の細部にすぎない。最初は「上海生まれの二世」という存在に興味を持ちはしたが，結局《彼の支那語は発音だけが取柄で，文字は読めないのだし，二年間支那語学校に通つだだけの人に比べても，知つている言葉の数は多くな》く，《支那を故郷に育つ人は，東京のアパートの四畳半で孫文や魯迅の日本語訳を読みふける人のやうな，支那民族への新鮮な探求心を持てない》ことを知り，がっかりする主人公。なかなか味わい深い短篇だが，ユダヤ人を書いた日本語小説として，後世に語り継ぐべきものではなさそうだ。

これに対して，伊藤恵子さんの『小説・わが上海』*My Shanghai 1942-1946, A Novel*（Renaissance Books, 2016）では，イルマ・チェスカという名前のドイツ系ユダヤ人との友情をふり返るのにかなりのページが割かれている。同書は，作者の母親が書き遺した日記の体裁をとった著作だが，その母親は，1942 年の 4 月，ちょうど復活祭の時期，クエーカー教徒のアイルランド人の家でイルマ・チェスカを紹介される。

二人の友情は，翌年，彼女が「ゲットー」に移り住んでからもずっと持続するが，日本人の主人公女性は，上海の上流日本人との付き合いもさることながら，ドイツ人の付き合いもないではなく，とくにドイツ人と結婚した日本人女性との付き合いは深く，うっかりナチス党員が多くを占めるというドイツ人たちの前で，このイルマのことを話題に乗せてしまう。

すると，《突然，凍りついた沈黙が訪れ》た（p. 42）のだった。ナチス党員もいる前で，ユダヤ人のことを話題にするなんて，なんとも迂闊な話だった。

主人公の「エイコ」は，英国暮らしが長かったのだが，ドイツの人種主義政策に関しては，無知だったようだし，日米開戦後も，特殊な治外法権的な空気を醸し出していた「旧租界」の人間関係に慣れるまでには時間がかかったようなのだ。

J・G・バラード（1930-2009）が『太陽の帝国』*Empire of the Sun*（1984）に描いたような，英国人・米国人の強制収容が上海で始まるのは，1943 年の 2 月以降で，ドイツ系や東欧系ユダヤ人の「ゲットー」が開設されるのも同じ時期だった。であればこそ，1942 年のあいだは，米国に拠点を置くユダヤ人難民救済組織「ジョイント」の活動が盛んだったし，それどころか「エイコ」は米国のユダヤ人活動家，ローラ・マーゴリス（1903-97）とも面識があったらしい。それが，1943 年に入った途端に，状況が一変する。そのあたりの日常が描かれていて，所詮，「小説」にすぎないのだとしても面白い。

ベルリン陥落の報を受けた1945年５月８日，《あなたの国にとっては嬉しいニュースではないでしょうけれど》と断りながらも，《指定地区では大騒ぎよ》と，イルマが言ってくる場面は，映画のワンシーンのようだ。そして，イルマは言う――《ここ上海じゃあ，空襲警報でおちおち眠れやしない。よくなる前に，まず悪くなるってことなのかもね。》（p. 294）

あくまでも「小説」なのだとはいえ，戦時下上海の「英語圏世界」の一端を見るのに，とても役立つ一冊だと言える。

◆下記は，二年前に伊藤恵子さんを日本に招かれた慶應義塾大学の巽孝之さんの紹介サイト⇒
http://www.tatsumizemi.com/2016/02/0309my-shanghai-1942-1946-1500-1700.html

Friday

1930年代の上海の記憶を呼び覚まそうという気運が大陸中国で高まるのは，1990年代，いわゆる「改革開放」以降である。

たとえば，上海生まれで，戦争時代も上海で過ごし，その後は香港経由で米国に移り住んだ作家，張愛玲＝アイリーン・チャン（1920-95）の名声が，大陸中国にまで轟くようになったのも1990年代であったし，まさに日本軍占領，国共内戦，文化大革命などの苦難の時代を経て，上海はふたたびその過去への再接続に挑戦しはじめたのだった。

『上海メモラビリア』（上海的風花雪月, 1998）の陳丹燕（1958-　）は, こう書いている――《ラジオで上海の若者からのリクエストがいちばん多いのは〔カーペンターズの〕『イエスタデー・ワンスモア』で。せっかくいい夢だったのに肝心なところで目覚めてしまい，堅く目を閉じてひたすら夢の続きを見ようとしている子供のようである。》（莫邦富・廣江祥子訳，草思社，2003，p. 34）

同書は，1990年代の上海が享受していた知的解放感を余すことなく伝える一冊で，日本や，あるいは米国における上海ブームが，あくまでも上海発だったということを知るのに打ってつけの本だ。

しかし，そうしたなか，公式的な記憶のなかでは，暗黒の時代であった日本占領期の上海を，それでも懐かしげに思い出そうとしているのが，ユダヤ人だったということもまた，そこにははっきりと書き記されている。

そこに登場するターナー（杜爾納）氏は，《オーストリア人》で，《一九四〇年，オーストリアから雪山を越えてスイスへ逃げ》，そこから《上海の逃れ》て，まずは《フランス租界の高級な一角に滞在した》のだという。

ところが《一九四三年，日本軍によって復興中路の家から虹口のユダヤ人隔離地区へと追いやられ，それが終戦まで続く》（p. 234）のだった。

そんなターナー氏がゲットー時代をふり返る――《ユダヤ人の子供は，不穏な情勢ながらも上海で安全に育った〔中略〕。隔離地区には児童公園もあり，母親たちが子供を日光浴させたり世間話をしていた。学校もいくつかあり，イディッシュ語を学んだ子供たちが毎年卒業した。共同墓地やモーゼ教会堂もあった。〔中略〕ユダヤ人青年とつきあう上海娘も多く，チャイナドレス姿で隔離地区を訪れては，ウィーンカフェで時を過ごしていた。〔中略〕ユダヤ人は上海で

再び自分たちの生活を始めたのである。容易なことではなかったが，そこには尊厳と喜びがあった》（p. 238）と。

このターナー氏は,《上海で〔中国人の妻と〕結婚して家庭を持ち, 漢字を覚え》て,《一九五二年，最後のユダヤ人たちとともに上海を離れて妻と日本に渡り，日本で七年間，アメリカで三年間生活し，その後故国オーストリアに戻った》というのだが,《オーストリア訛りのドイツ語と日本語とアメリカ英語が話せる》彼は，しかし,《上海語で言った。「でも，わしらは上海人です」》（p. 234）と。

このターナー氏に日本人が日本語で取材をしていたら，また別の思い出話が聞けたことだろうと思うが，まさに彼は「ドイツ語圏」と「イディッシュ語圏」,「日本語圏」と「上海語圏」,そして「上海の英語圏」から「アメリカの英語圏」というふうに「語圏」のあいだをさまよいながら戦争と革命の時代を生き延びたのだった。彼には言葉を渡り歩きながら自分史をふり返るというのが，ひとつのスタイルなのだろうと思う。

Monday

日本人（あるいはドイツ系，東欧系のユダヤ人）が上海を懐かしむときには，決まって第二次世界大戦期を含むのだが, 上海人の場合は, かならずしもそうではない。前便でとりあげた『上海メモラビリア』の陳丹燕は，中国の画家で，美術教育の先駆者であった顔文梁（1893-1990）のことをふり返りながら，その顔文梁が《1931年に西洋美術の石膏像を中国へ大量に持ち帰った最初の人物》（莫邦富・廣江祥子訳，草思社，2003，p. 59）だったことに注意を促しておられるが，じつは中国を襲った不幸な歴史の結果，その《オリジナルは〔中略〕完全に消えてしまった》（p. 61）ことに触れることも忘れない。それらの石膏像は，顔文梁が蘇州に設立した美術専門学校に収められていたのだが，まずは,《一九三七年，日本軍が蘇州に侵攻し，蘇州美術専門学校は日本軍の司令部によって占領され》,《日本兵は石膏像を銃の標的にした》のだった。次に,《一九六六年，紅衛兵は四旧（旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣）の打倒を実践し，石膏像の展示室を徹底的に破壊した》（pp. 60-1）というのである。つまり，上海人が「イエスタデー・ワンスモア」というプロジェクトに着手するにあたっては，少なくとも，1937年の日中戦争の本格化以前への「再接続」を目指すのであって，それは「1949年以前の上海」でも,「1945年以前の上海」でもないのだ。

同じ陳丹燕の『上海プリンセス』（上海的金枝玉葉，1999）は，華僑のひとりとしてシドニーに生まれ，8歳のときに一家で上海に移り住み，父は「永安公司」という名の百貨店で成功，彼女自身もファッションサロンを開いて華やかな日々を一度は送ったという女性，郭婉イン【草冠に宝】（1909-98）を描いた一種の伝記だが，その「伝記」のなかで，1937年から45年までの日本軍占領期は，主人公が子どもを産み，子育てをした時期にもあたるが,「ほほえみをなくした時代」として，きわめて簡素な扱いをしか受けていない。

《この年〔＝1937年〕，デイジー〔＝主人公の愛称〕は自分の好きな仕事を失った。彼女は妊娠し，上海を離れて香港に行った。しかし香港が好きになれず，子供が生まれる前にまた上海に舞い戻った。日本人は，夫のミルク工場を爆破し，夫は職を失った。》（大場雅子訳，光文社，

2003, pp. 111-2）

その後，失業中の夫のかわりに，デイジーは《中華医学会の雑誌の広告を受け持ち，ドイツ人といっしょに楽しく仕事をし》（p. 113）ながら，家計を支えたともいう。ただ，その後，《日本人といっしょに働きたくなかったので，仕事をさめた》（p. 114）ともいう。

日本の敗戦後，彼女とその夫は，ふたたび羽振りの良い暮らしを経験するが，1956 年ごろから，「右派」として告発を受けるようになり，夫は 1958 年に逮捕され，1961 年には獄死するのだった。彼女自身は，英語力を武器にして何とか食いつなぎ，子どもを育て上げるが，1990 年にオーストラリア国籍を取得するまでの後半生は決して華やかなものではなかったようだ。

陳丹燕は，1996 年，その彼女に出会い，その彼女の最晩年に最も頻繁に付き合ったひとりとなったのだった。

Thursday

張愛玲の名声が，世界的に見ても急激に高まるのは，彼女がロスアンジェルスで亡くなってから以降だが，とりわけ上海作家としてのその名声は，短篇「色，戒」（1977）が，李安＝アンリー（1954-　）によって映画化（『ラスト，コーション』*Lust, Caution*, 2007）されたのが大きかった。

同作は，第二次世界大戦中の上海で，《汪精衛〔＝兆銘〕政権の高官》（垂水千恵訳，『池澤夏樹＝個人編集・世界文学全集 III-5』河出書房新社，2010，p. 74）であった易（イー）氏と不倫関係を結んだ佳芝（チアチー）という女性の非業の死を描いたもので，《自分たちの関係は，太古の狩人と獲物の関係だ。虎にかみ殺された人間は幽鬼となって虎を助けるというが，その虎と幽鬼の関係だ。〔中略〕佳芝は生きていた時は俺の女，死んでも俺の幽鬼，なのである》（p. 117）というような男側の不遜な開き直りを激しく告発する作品として，女性文学の面目躍如たるところがある。

ただ言語という側面から見たとき，易氏は，インド人の経営する宝石店でも，《日本留学組なので，英語を話そうとはせず〔中略〕役人ぶって通訳させる》（p. 103）と書かれており，佳芝もまた《内地〔＝香港ではなく内陸〕の学校の出身》で，《香港ほど英語を重視した教育は受けていなかった》（p. 108）ということで，インド人とのやりとりもたどたどしい設定である。

そんな二人が《強制収容所に入れられた英米人の部屋》（p. 92）で逢瀬を重ねるのだが（映画では，西洋人の家族写真が置き去りにされ，家具調度は埃をかぶっている），まさに「英米人が消された上海」のなかで，「英語を話すアジア人」としてのインド人が，唯一，英語を話す登場人物として登場するのだ。そして，宝石店の店主はもう一人の店員に向かって，《たぶん，ヒンディー語》で《何か叫んだ》（p. 104）ともある。

これが「大東亜共栄圏」の一部としての上海の縮図だということなのかもしれない。

映画版では，易氏が佳芝を虹口の日本料亭に招き，そこで日本の芸者の歌の向こうをはって，彼女が上海歌曲を歌うという見せ場もあるのだが，「英語圏」がそうであるように，「日本語圏」もまたそこでは「委縮」した姿でしか描かれない。

作品全体が香港時代をもふり返る形でできあがっており，たぶん映画のなかでも，上海語や広東語がスリリングに交錯する形で，「豊饒な華語映画」としてしあがっていると思われるが，まさに「英語圏」や「日本語圏」をミニマルに切り捨てたところに戦時下上海の実相が浮かび

あがる作品だと思う。

映画版には，湯唯（タンウェイ）（1979-　）が演じる佳芝が上海で日本語学校に通う場面があるが，日本語教師が「あなたが【「が」に傍点】わたしに【「に」に傍点】」と，日本語の助詞を教えながら，「日本人というものはずいぶん頭を使っているものだということが分かります」と上から目線で教えているシーンが，笑うに笑えない味を出している。

そして，日本の敗戦後，そして汪精衛政権の崩壊後（汪自身は1944年11月に名古屋で死亡），易氏もまたこの世では生き延びられなかった可能性がある。モデルとされた丁黙邨（1903-47）は，日本の敗戦後，一時は国民党政権に採用されるも，最終的には「漢奸」としてつかまり，処刑されている。

逆に，張愛玲自身が1944年から47年まで婚姻関係を結んでいた胡蘭成（1906-81）もまた汪精衛政権関係者であるにはあったが，この胡は，1950年に日本へ亡命したとのこと。

Monday

張愛玲の「色，戒」は，後に『惘然記』（1991）という短篇集に収録され，これが日本ではまるごと『ラスト，コーション』（南雲智訳，集英社文庫，2007）として，同短篇の映画化に合わせて刊行された。

同短篇集には，四編が収められているが，「浮き草」（浮花浪蕊）という作品もまた，いかにも張愛玲らしくてひきこまれた。1950年ごろ，ということは，張愛玲はまだ上海におり，最初の夫だった胡蘭成が日本に政治亡命した時期にあたる。なんとも謎めいた小説なのだが，人民解放軍による「解放」の後，上海文化の担い手たちが，重大な決断を迫られた時代を，ある意味で戦列によみがえらせる作品だ。日本の敗戦後もしばらくは上海に留まっていた武田泰淳（1912-76）や堀田善衛らも，結果的に上海を離れ，一時期は一定の「言語圏」を形成していた「日本語圏」が風前の燈火と化した時代の上海を描いた小品だとも言える。

主人公の若い女性（＝洛貞）は，《警察への泣き落とし戦術》なるものを弄して，《やっと出国許可証を手に入れ》（p. 166），《日本，香港，タイを運行航路としている》という《ノルウェーの小さな船舶会社》（p. 143）の《貨物船》（p. 142）に乗りこんで，これから単身で日本に向かおうとしている。《同窓生のところに身を寄せる》つもりでいるようだが，その《彼》も《日本語ができない》（p. 176）と言い，結局，《洛貞はできるだけ遠くへ行きたいだけ》（p. 180）で，それがたまたま日本であったというだけなのだった。

そんな彼女は，日本行きの船に乗りこんでからも，戦争が終わってから五年間の上海を思い出すばかりで，未来への希望もなにもないのだが，西洋の船ということもあって，サマセット・モーム（1874-1965）のけだるい小説を思い出さないではおれないのだ。とりわけ，そうした空気を漂わせていたのが，客室に案内されてきた《中年の男女》で，二人が話している《言葉は英語らしい》（p. 143）。

洛貞は，この二人が何ものかを少しずつ探り当てていくのだが，次にすれ違った際には，《男は純粋な英語だが，女性はよくわからない訛りがある》（p. 151）という二人が話している英語の違いが気になりはじめる。《二人が黄色と黒色》（p. 150）であったという見た目から推測すると，

男の方は《イギリス人とインド人の混血に違いない》ということになる。逆に，女の方の「訛り」は《半中半洋の混成英語ではない》（p. 151）ので，すぐに身元は分からない。

そこへ，女の方が船室をノックしてやってくるのだ。《私たちは虹口に住んでいましたの》と言うので，《日本の方ですか？》と念を押すと，《はい》（p. 170）と言う。

主人公の洛貞は，上海には西洋人男性と東洋人女性のカップルが次々に誕生していることは知っていた。彼女がはたらいていた職場には，カリー氏という《ハンサム》（p. 169）な英国人男性がいたのだが，その彼が日本軍の租界への侵攻後，妻とともに《強制収容所に入れられてしま》い，これに同情した，会社でカリー氏の《女性秘書》だった女性（＝潘さん）は，《定期的にカリーさんに食料を差し入れ》，戦争が終わって《収容所から出るや否や》，カリーさんと西洋人の妻は《離婚してしまい》，彼は《潘さんと結婚したのだった。》（p. 173）

しかし，そんな過去をふり返りながら，洛貞は，《もし私が彼の秘書だったら，私もきっと食料を差し入れたに違いない》（p. 174）と確信するのだ。

「西洋人男性と東洋人女性のカップル」が続々と産み出された戦中から戦後にかけての上海で，洛貞はまだ《結婚できない》（p. 168），そんな《宙ぶらりん》（p. 176）な状態で，東京に向かおうとしているのだが，これは短篇「色，戒」の主人公（＝佳芝）の場合にも言えたように，彼女は「日本語圏」にいつ足を踏み入れてもおかしくない状況のなかで，しかし，そこからは距離をとり続けるのだ。戦中の上海で日本語を覚えなかったのも，何らかの意志の産物であったかもしれないし，東京行きの船のなかで，「日本人の女性」と知り合ったにもかかわらず，彼女はその日本女性に近づいていこうとしなかった，《日本語の会話をいくつか教えてもらえば，道を尋ねる時にも，多少に役に立つかもしれな》いと，打算を働かせさえしたのだが，それでも彼女は《行かなかった》（p. 186）

張愛玲が小説を書きはじめた1940年代の上海で，日本留学組をも含め，日本語に堪能な中国人作家は少なくなかったし，それどころかその多くは日本の新感覚派やプロレタリア文学の影響をも受けていた（鈴木将久さんの『上海モダニズム』には，日本の詩人から強い影響を受けていた路易士【るびｒロイス】＝紀弦〔1913-2013〕に張愛玲が高い評価を与えている1944年の批評文が引かれている――東方書店，2012，p. 180）。

そんななかで，張愛玲のなかには「日本語圏」への接近を思いとどまる何らかの力がはたらいていたのかもしれない。そして，彼女は日本ではなく，米国へと，その後，旅立ったのだった。「日本語圏」に比べれば，拒否感の少なかったのであろう「英語圏」に向かって。

Thursday

『堀田善衛上海日記』（紅野謙介編，集英社，2008）は，1945年8月6日の記載から始まるが，《今朝武田さんのところを出て小餅（二つで千元）を食ひ乍ら，私は将来のむずかしさを痛感しつつ歩いてゐた》（p. 16）と始まる（武田さんは，武田泰淳のこと）8月11日の項は，《詩人路易士》が《和平！　和平！　和平です！》と言いながらあらわれる場面へと引き継がれる。そして，将来が見えなくなった堀田たちは，疲れ果てて家に戻るのだが，そこで武田が言う――《日本民族は消滅するかもしれぬ，そして若しも自分が支那にゐて生き残ることがあつたら，嘗て

東方に国ありき，というふことを中国人に語りつたへねばならぬ》と。そして，これに対して堀田はこう応じたというのだ――今日この時の中国人のうつりかはりといふものを，人の心の内面の問題として，単に政策的なことではなくて〔中略〕人の心にしみ入るやうな具合にして内地の人に知らせねばならぬ》と（pp. 23-4）

ここでは，前便でも名前を挙げた路易士＝紀弦（1913-2013，写真）も含め，日本語を介して結びついていた日本人と現地人の「言語空間」が拾い集められている。

しかし，この日の出来事を下敷きにして書かれた「漢奸」（初出，1951年9月）という小説は，路易士と思しき《上海で生れ育ち，日本語を学び，日本の新しい詩に凝》り，《「詩と試論」や「詩・現実」「新領土」などという日本の前衛詩雑誌は〔中略〕聖書のようなものであった》（『堀田善衛全集①』筑摩書房，1993，p. 371）のだという安徳雷（アンドレ）をめぐる身に沁みる物語なのだが，さすが上海を舞台にした小説なだけあって，物語が「日本語圏」の内側に閉じない作りになっている。

街を歩きながら，主人公（＝堀田ではなく，匹田）と安徳雷は，日本語での会話を続けるが，そこへ《東洋憲兵〔トンヤンシェンピン〕をやっつけろ！》という上海語（？）が聞こえてくる。そして《それが安徳雷が叫んだものであったとしても，匹田はもう驚かなかったであろう》（p. 373）とある。

8月15日を待たずして，すでに8月11日の夕刻に，上海の「日本語空間」は，徐々に足場を失いつつあった。

そして，それでも《わたし，子供，六人あります。子供，可哀想です。わたし漢奸詩人，いいです，仕方ありません。けれど，子供，可哀想》（同前）と日本語で情けを乞う安徳雷が哀れでならない。《友人というものも日本人のほかには殆どないらしかった》（同前）というのは，堀田の勘違いだったかもしれないが，少なくとも小説中の匹田は，そう感じている。

そんななか，匹田は《安徳雷の助手をしていた〔中略〕口数の少ない十八九の〔中略〕潘柳黛》（p. 381）という女性のことを思い出す。そして，この潘柳黛は《日本語は聞きわけたが，うまく喋れなかった。匹田の北京語とおっつかっつであった》（p. 383）とあって，そこからは，日本人と中国人がたがいにピジン語でやりあっていた当時の空気が伝わってくる。

《珈琲店尼古拉（ニコライ）》につとめる《ロシア娘のニーナ》と日本人が《英語ロシア語ちゃんぽんで》（p. 377）話すのと似たようなものなのだ。

逆に，匹田が《部屋に入った》とたん，一人の中国人は《北京語で喋っていたのを，急に広東語に切りかえた》というような微妙なかけひきもそこには書かれており，要するに，上海に来て数カ月を経て，《北京語ならばどうにか理解が届くようになっていた》（p. 382）匹田の手の内は見えていたのだった。

そんななかで，「日本語はうまく喋れなかった」はずの潘柳黛が，いきなり《流暢に日本語を喋》（p. 388）場面もあれば，《暗闇の中に中国服，背広，軍服など種々様々な装束をした男たちがうろうろし》ているあたりに，《二階の朝鮮人がとび出して兵隊に止められ》（p. 389）などという，《旧フランス租界》（p. 388）の出来事もありげなく書かれている。日本の敗戦が濃厚となった時期の上海で，「朝鮮人」には何らかの「高揚感＝解放の予感」があっただろう。

こういった細部の描写が，どこまで堀田の記憶に基づくものであったのかは，確かめようがないが，それこそ張愛玲が胡蘭成と婚姻関係を結んでいた時期の上海を考えるときに，堀田善

衛や武田泰淳の上海ものには，一定の証言能力がある。

ちなみに『堀田善衛上海日記』にある「日本民族は消滅するかもしれぬ，そして若しも自分が支那にゐて生き残ることがあつたら，嘗て東方に国ありき，というふことを中国人に語りつたへねばならぬ」云々という武田泰淳の言葉は，「漢奸」のなかでは，「大島」という名の男の言葉として，次のように拡張されている――《結局だ，日本の文化を本当に文化として認めることの出来るのは，中国人じゃねえか！　フランス人が何でえ，フランス人は日本の現代文化を文化と思っとるか！〔中略〕おめえ，今日，きっとアンドレとごそごそやってたんだろ，そうだろ？　アンドレの奴あ，フランス語ができるわけじゃねえしさ，あいつとフランス文化と何の関係があるんさ。日本じゃねえか，日本文化じゃねえか！》（pp. 388-9）

「日本民族は消滅する」としても「日本文化は生き残る」とでも言いたげで，アンドレ（＝路易士）のような「日本語圏」に依存している中国人の存在が，「日本（語）文化」の永続性を保障するという論法になっているのだ。

Saturday

堀田善衛の「漢奸」（初出，1951年９月）は，「上海モダニズム」の立役者だった路易士（1913-2013，台湾に移住後は「紀弦」として活躍）をモデルにした小説だが，そもそも「上海モダニズム」の担い手の多くは日本留学組で，日本のプロレタリア文学や新感覚派の影響を，日本軍占領下の上海においてさえ引きずりつづけた，それこそ「治外法権的なモダニズム」であったというべきなのかもしれない。路易士は《日本文人と盛んに交流したが，官職にはほとんどつかなかった》が，《汪精衛政権のもとで新聞社社長に就任するが，重慶の国民党特務機関から送り込まれたスパイだったという噂が存在する》穆時英（1912-40）にしても，《表面的には日本と協力しながら，地下において延安や重慶の人士と連絡をとっていた》という陶晶孫（1897-1952）など，《上海モダニストたちは，戦争の流動的な状況下での判断の一つとして，対日協力を選択した》（鈴木将久『上海モダニズム』東方書店，2012，p. 24）のだった。堀田善衛にしても，あるいは武田泰淳にしても，彼ら中国人詩人や作家たちと全人的に付き合っていたわけではなく，いわば「日本語圏」の空気のなかでだけ接しあっていて，これに加えて，彼らが中国語で書いたものをある程度までならば読んで批評することも可能だったのである。

たとえば，『上海の螢』の武田泰淳は，《上海自然科学研究所につとめていたＴ氏》（＝陶晶孫）について，《かつて，郭沫若や郁達夫と同様に，文学団体「創造社」の一員だった。数すくない彼の著作を，わたしはのこらず読んでいた》『上海の螢／審判』小学館，2016，pp. 27-8）とふり返っている。

上海語や広東語になるとなかなか聴解するには苦労させられた日本人が多かったようだが，上海の文人は「日本語圏」と「中国語圏」をまたにかけ，その上，「英語圏」にも首をつっこみながら，インド人やユダヤ人やロシア人にも接したりもしていたのだった。そして，日本の敗戦後，英米人が戻ってきて，さらに重慶や延安に逃れていた中国人もまた上海に押し寄せてきたというわけだった。

ところで，上に挙げた鈴木将久さんの『上海モダニズム』には，《一九三七年の上海戦時の体

験を題材にした〔陶晶孫の〕日本語作品「留守番日記」》についての紹介がある。

戦争の激化を危ぶんだ陶は《妻子を日本に帰し》（妻は日本人だった），《上海自然科学研究所の敷地に避難した》（p. 255）というのだが，戦争のほとぼりが冷めた頃，家に戻ったときのことを書いた箇所である。

> 私共の犬がこの家を死守して犬小屋に死んでゐた〔中略〕。私は我が喪家　の狗を丁寧に可愛がる閑と大事に世話する財を持たなかつた。私共の犬は主人と大道に藝をする犬のやうに汚かつた。他の犬のやうな傲気はなかつた。〔中略〕私は犬の骨を拾ひ，爪を拾ひ毛を集め，子供たちが書き初めの唐紙に「餓死小事，忠節事大」と書いて忠犬の霊に手向け，彼女が国籍に随ひ日章旗をかけて旧居を去つた。（初出 1940）

鈴木さんは，これを引いた後，《陶晶孫は息子にこの一文を解説して，「これはユーモアである。この日本産の犬は日本が起こした戦争で死んだ。それに烈士の名誉を授けることでこの侵略戦争を諷刺したのだ」と語ったという》と，息子（＝陶坊資）の「回想」を引いてもおられる（p. 257）。

Tuesday

『上海にて』（筑摩書房，1959）は，《一九四五年三月二十四日から，一九四六年十二月二十八日まで，一年九カ月ほどの上海での生活》（集英社文庫，2008，p. 9）経験を有する堀田善衛が，《一九五七年秋に，中野重治，井上靖，本多秋五，山本健吉，十返肇，多田裕計などの人々とともに，招かれて旅をした》際に感じとったことを書き記した旅行記である。『時間』（1955）を書くことで，《日本と中国とか，中国と日本とかいうことがらが，作家として立つことのなかでの〔中略〕重い内在的な問題になる》という思いに捌け口を与えたはずの堀田ではあったが，旅のなかでも《その重さを私は自分のうちがわのこととして確認させられた》（p. 10）という。

このなかで堀田は，日本の敗戦前後のことを「回想」として語っているが，1945年8月15日のいわゆる「玉音放送」を聞いた日の感慨を彼は次のように書いている――《私は，天皇が，いったいアジアの全領域における日本への協力者の運命についてなにを言うか，なんと挨拶をするか，私はひたすらそればかりを注意して聞いていた》（p. 119）というのである。彼は《大東亜文学者大会というものに参加した柳雨生や陶亢徳などの，侵略者であった日本側に協力した文学者たちの運命を気にし》（p. 119）ていたからである。

これは「天皇の赤子」の耳ばかりでなく，日本語をも愛し，日本文化の指導力に何らかの期待感をもって「日本側に協力した非日本人」の耳をも介して，いわゆる「終戦勅語」なるものに耳を傾けたということになる。

《そういう聞き方をした日本人というものは，あるいはそう数が多くはなかったかもしれない》と自分でも書くのではあるが，堀田には《負けたとも降伏したとも言わぬというのもそもそも不審であったが，これらの協力者に対して，遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス，という，この嫌味な二重否定，それっきりであった》のが情けなかったのだという。《その薄情さ加減，エゴイズム，

それが若い軀にこたえた》（p. 120）のだと。

じつは，日本の無条件降伏について，四日ほど前から情報を得ていた堀田たちは，すでに《「中国文化人ニ告グルノ書」というパンフレットをつくるつもり》で，《当時上海にいた小竹文夫，武田泰淳，末包敏夫（牧師），内山完造，故刈屋久太郎（大使館）などの人々》とともに動き出していたのだった。《日本がかくの如き運命に陥ったということについての，弁解とか，戦争の正当化とか，通り一遍の詫び言などというのではなくて，正確な一言，を書いてほしいと依頼し，原稿は実に立ち所に集って来，それを〔中略〕故室伏クララに片端から中国語に訳してもらい》（p. 121），まさにそれを印刷してもらおうとして立ち寄った印刷所で，「玉音放送」に機先を制され，《八月十五日夕刻には，当の印刷所内で，とうとう騒動がおっぱじまってしまった》のだった（p. 122）。

《戦後になってからも日本人の仕事をしたとあっては，後方からかえって来る主人たちによくは思われないだろう》（p. 123）という論理が勝利を収めたのだ。

《朕ハ帝国ト共ニ終始東亜ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス》――日本語で発せられたこの「勅語」は，植民地の「帝国臣民」はいざしらず，中国大陸においても日本語に親近感を示した多くの者どもの耳にも流しこまれたのである。それが通り一遍の「遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス」で済まされては，中国人の友人を持つ上海の堀田たちの立場がないではないか，というわけである。

天皇であれ，内閣総理大臣であれ，国家の元首（あるいは国民の代表）が「国語」を用いて話す言葉は，「国民」向けの「私語」ではないのだ。とりわけ「帝国的な支配圏の拡大」を図っていた大日本帝国の元首であれば，「帝国の日本語」に耳を傾けるだろうすべての「日本語圏」の構成員に向かって，「日本語圏」の拡大を意図した「大東亜共栄圏」なる構想の頓挫を語るべきだったのだ。さまざまな「耳」がそれを聴いているという自覚の上で。それを「遺憾」の一語で片づけ，それで水に流せというのは，あまりにも横着で非礼なことだっただろう。

みずからが関与したことが明らかな過去をふり返るにあたって「遺憾」というマジックワードを用いるという安易な便法とは手を切ること。そういった決断が，今からでも遅くないから，必要な気がする。

Thursday

1937年夏から1945年夏までの８年間，上海の中国人は日本軍の強権的な占領をどうやり過ごしたのか？

映画になった原作の「色，戒」もだが，この時期を描いた張愛玲の作品群を読むと，日中戦争に翻弄されながらも，ひとつひとつ恋を積み重ねていくしかなかった中国女性の姿が身近に受けとめられる。

『中国が愛を知ったころ／張愛玲短篇選』（濱田麻矢訳，岩波書店，2017）は，趣向の異なる三作を集めたコレクションだが，「同級生」（同學少年都不賤，死後出版）は，《米国を描いた小説はこの一作のみである》（「訳者あとがき」p. 181）とのことで，1920年代の上海から1960年代終わりの米国までという長いタイムスパンの上に書かれた，短いけれど壮大な作品だ。

女学校の寄宿舎を扱った部分は，1920年代の上海に育った張愛玲自身の思春期を彷彿とさせるかのようなリアリティにあふれ，《学年は二つ上》だった先輩に憧れる場面などは「少女小説」ならではのスリルをも醸している（思春期以降の女性が，同じ女性の乳房の豊満さや，その位置の高い低いの見定めにいかに躍起になるものかを思い知らされた）。

そうこうするうちに，第二次上海事変を経て，日本軍が上海を制圧するようになるのだが，主人公（＝趙珏：ちょうかく）も，同級生として親しくした恩娟（おんけん）も，それぞれ異性関係にひきずっていかれるようになる。

《ナチに追われて中欧から逃げてきたユダヤ人》から《バイオリンを習っていた》（p. 134）こともある恩娟は，いつしか《ベン・リーヴィ》という《家族でドイツから逃げてきた》同じくユダヤ人から《一緒に内地に行こう》（pp. 115-6）と誘われて上海を離れ，重慶に移り住んだのだった。趙珏と恩娟が再会するのは，日本が戦争に敗れた後だった。

他方，趙珏は同じ時期，《北京と上海間を往復する担ぎ屋》（p. 134）をするうち，《朝鮮人の無頼漢と曖昧な関係を結んでいた》（p. 136）といい，結構，波乱に富む時代を送ったらしい（そういえば，「色，戒」の女性主人公も上海と香港のあいだの「担ぎ屋」を装っていた）。

その二人が戦争を生き延びて再会した後，恩娟は早々に夫と渡米し，夫のベンは出世街道を歩んで，二人は《四人の子供》（p. 143）を授かっていた。他方，一足遅れて，やはり渡米した趙珏は，萱望（せんぼう）という中国人の男性とつながりを維持してはいたが，その彼は《台湾に家族が多数》（p. 142）いて，趙珏の米国暮らしは安定しない。

そんな二人がひさびさの再会を果たすのだが，かつては《上海語が話せなかった》（p. 119）趙珏も，いつのまにか《上海語も話せるように》（p. 138）なっており，《何なら上海語で話しましょうか》と持ちかけるのだが，恩娟は《頭（かぶり）をふ》る。二人は，あいかわらず《標準語で話》（p. 146）したのだった。

《ベトナム戦争と反戦運動》（p. 150）の高まりのなかで，学生のあいだでは《セックス革命》（p. 152）が進んでいる。そのなかでかつての「同級生」二人のステイタスは，遠ざかる一方なのだが，趙珏は戦時中に付き合っていた朝鮮人の《崔相逸から学んだ朝鮮語》の力を武器に，《通訳センターを紹介して》（p. 155）もらうなどして，何とか糊口をしのいでいる。しかし，そうはいっても，1960年代後半になると韓国系アメリカ人の数も増えてきて，《朝鮮語を翻訳してくれる韓国人を見つけたから〔中略〕辞めてくれ》（p. 161）と言われて，なかなか潰しはきかないのだ。

そうこうするうちに，恩娟の夫は，権力の梯子を上昇し，趙珏は《『タイム』で恩娟が大統領のヨット〔中略〕にいる写真を見》（p. 165）ることになる。

どんな男にしがみつくかで，まったく違った未来が女たちには待っている。故郷の上海を棄てて，米国に移り住んだなら移り住んだなりに，人生は分岐していくのだ。

張愛玲がこの小説を書いたのは，1970年代であったと言われるが，1980年代になると『ジョイ・ラック・クラブ』*The Joy Luck Club*（1989）のエイミ・タン（1952-　）のような中国系二世英語作家が登場してくるのだった。

しかし，趙珏の晩年が幸福ではなさそうなのと同じく，張愛玲もまた孤独な老後を送り，彼女の死亡が確認されたのは，死後四日後で，それもアパートの大家が発見したとのことだ。中国語圏でのその名声は高まりつつあったとはいえ，それは彼女の孤独を癒せるものではなかっ

た。

すでに触れたように，張愛玲は上海を描くのに「日本語」の影に触れることを避けるきらいがあるのだが,「同級生」の場合も同じで，戦後の上海のなかで《洋服を着ている女性は少なかった》なか，洋服姿の趙珏は《見たところ日本人のようだった》（p. 135）というような記述がある程度で，日本語の響きは描きこまれない。

しかし，そこを除けば,「色，戒」がそうであったように,「同級生」は「多言語的な世界」を描こうとする意欲にあふれていて，これはまさに張愛玲の特徴のひとつだ。

Sunday

『外地巡礼／「越境的」日本語文学論』（みすず書房，2018）の巻頭論文「日本語文学の拡散，収縮，離散」のなかで，私は横光利一の『上海』を「2：大陸進出，南方進出」というフレームのなかで取り上げ，その上で《二〇世紀の上海を文学史的にふり返るには日本語や中国語だけでは足りず，英語やフランス語やロシア語までを含めた比較文学的なアプローチが不可欠でしょう》（p. 14）と書き添えたほか，さらに「4：敗戦と総引揚げ」と題したパートで武田泰淳と堀田善衛に触れ,《国共内戦へと突入していこうとする上海をあてどなくさまよう「国なき人々」のうちにみずからを数え入れることで「横光利一的な上海」を過去へと葬り去ろうとし》た彼らの独自性に注目した。《上海での敗戦体験は，アジアにおいて日本人として生きるということがなんなのかという問いをこのふたりに突きつけ》（p. 22）たと。

しかし，上海関係の文学作品に手を延ばしてきたなかで，日本の植民地支配や治外法権的な領土的支配が長引くなかで生じた「外地生れの日本人」というもうひとつの問題があることに気づかされた。これは南北アメリカの日本人移住地では「二世問題」と呼ばれる問題で，彼らは「継承語」としての日本語を習得することはあっても，それとは別に「現地の言葉」と「日本語」のあいだでさまざまな葛藤を経験することになる。また現地のハビトゥスが身についてしまうことで，もしも内地に戻ることがあっても，そこが「故郷」だとは思えない。しかし,「移住地」においてならば自然に身につくはずの現地の「国民文化」が十分にすりこまれないために，結局,「日本人でも現地人でもある」のではなく,「日本人でも現地人でもない」というアイデンティティの様態ができあがってしまう。こうした「文化喪失」の現象は,「植民地二世」の引揚者に顕著に出るのだが，すでに敗戦以前からこの問題に関心を持っていた一人が，池田みち子だった。

その「上海二世」には，話者が上海航路の船のなかで知り合ったという《上海第二世》の村山は,《子供のゐない伯父の家を繼ぐ約束で岡山まで貰はれてゆき，三ケ月ゐたぎりで，また上海へ逃げだしてくる途中》だったのである。内地に不適応を起こした理由はさまざまであったようだが,勤めた《会社へゆくと〔中略〕》ボーイから便所掃除までみんな日本人で》あるのに《おどろき》,《お茶をもつてこいとかなんとかボーイに云ふのがきがね》だったというのだ。また《同僚に課長の悪口を云つた》のはいいが,《ボーイが日本語をわかるんだつてこと》を《うつかり忘れてゐた》ために,《あとで告口されてこまらされました》（『三田文学』1941 年 11 月号，p. 87）という。

私は40年近く前のワルシャワでこんな話を聞いたことがあった。日本の商社は現地人スタッフを雇うにあたって，日本語の出来る現地人は雇わないというのだ。かといって現地人とポーランド語で話すのではなく，公用語はあくまでも英語なのだ。そして日本語は日本人同士の「秘教的な言語」として特別扱いにされていた。

似たようなルールは，上海の日系企業に同じくあったかもしれない。

しかも，池田みち子の「上海二世」を読んでハッとしたのは，村山が《内地から雇つた人には海外手当を出すので自分たちよりも割がよい》と不平を漏らした部分だった。「現地採用差別」の慣行は，これもまた日本企業の海外支局ではかならず維持されている。《土地の事情に通じてゐるのは，それだけ強み》なはずなのに《以前から上海にゐるといふことで，就職の條件が悪くなるのは可笑しい》(p. 94) と小説の主人公の女性も言うのだが，まさにそうした同じ「内地人」ではあっても「現地育ち」を見下し，冷遇するようなシステムのなかで，「二世」たちは冷や飯を食わされていたのである。

日本の帝国主義は，本国から多くの入植者を外に送り出し，そうした植民地の現地人を民族的に蔑視するだけでなく，「入植者二世」をもまた「準現地人」のように扱う。そして，そうした差別に晒されながら，しかし，上海生まれの村井のような人間は，「ボーイから便所掃除までみんな日本人」だという内地社会を劣等社会であるかのように錯覚してしまう。

じつはこのような話は，私は何度もブラジルで耳にした。日本企業の現地採用の話もそうだが，現地の日系人が日本から来る日本人の上から目線に怯えるとか，逆に規律を重視しすぎる日本社会を窮屈な社会であると感じるとか，ところが，いまもなお温存されている階級意識はブラジルの白人たちから学び取っていて，想像以上に，有色人種（日本人以外のアジア人も含む）に対する差別意識は強いとか。

こうしたことは，上海のような，「名誉白人」としての威厳をちらつかせながら，日本人がさまざまな影響力を行使していた上海のような街にひとつの原型があったのかもしれないと思う。

ただ，そうした上海のあり方は，日本の敗戦とともに幕を下ろし，それこそ「上海二世」の村山のような男も，引揚船の乗客となって，戦後の日本に戻って，日本社会への順応を余儀なくされたのだろう。

Wednesday

「外地小説」のなかで，男性の性遍歴がなにがしかの形で売りになるのは珍しいことではないのだが，池田みち子の場合は，それを女性の立場で試みているところが，まさに希少価値を生んでいる。戦後の池田は，山谷あたりを拠点にして，底辺の女性たちになかに向けて潜入を試みるのだが，上海時代の彼女は，中国人やユダヤ人，場合によってはジプシーの集住地区に住みこむというようなフィールドワークと，体を張った性的な渉猟（小説のネタになったのはその一部だろう）とが，ほとんど不可分となっていて，それがはらはらするような「民族誌」を産み出しているのだ。

そして，そのときに，彼女が上海に滞在した時期が，1940年から41年にかけて，要するに，ナチスのポーランド侵攻（1939年9月）の後に，ヨーロッパでは「奇妙な戦争」が続いていた

ところに，電撃的なナチス・ドイツ軍のデンマーク・ノルウェイ侵攻（1940年４月），オランダ・ベルギー・フランス侵攻（1940年５月）があって，これに便乗したファシスト・イタリアもまたフランスに侵攻して，まさに日独伊三国同盟が結ばれる（1940年９月）時期から，これまた電撃的なナチス・ドイツ軍のソ連侵攻（1941年６月）があった時期にあたる。

まさにこのころ杉原千畝（1900-86）のビザを手にした東欧系ユダヤ人の来日や上海行きがあったりしていたわけで，他方，日本軍の南進は，いまだ仏印進駐（北部へは1940年，南部へは1941年）でいたが，いまだ対英米戦争にはふみこまない状態で，満を持して，機会をうかがっていたのが，この時期だった。

そんななか，前便でもとりあげた「上海二世」には，当時の戦況をめぐる話題があちこちにちりばめられていて，《ここの日本語新聞の投書欄では前線の将兵を見よと云はないで，「銃後の国民を見よ」と内地の生活をひきあいに出す》（p. 83）といったあたり，なるほどと思った。

また，《僅かの東洋人のダンサーをのければ大抵は国籍のない白人の娘たちであつた》（p. 99）といった，いかにも上海らしい風景を描きつつも，《イタリヤとアメリカの兵隊がごちやまぜになつてグラスをあほつてゐる》(p. 98)様子に異様さを覚える時代の空気が感じとれる。そのころ，《ヨーロツパでは，イタリヤ本国兵はギリシヤに進軍したまま悪戦をつづけて》おり，《上海の英字新聞ではその遅々としてはかどらないギリシヤ戦線の部分的なイタリヤの退却をひろつて宣伝につとめてゐ》（pp. 98-99）たのだった（1941年４月にはイタリアに代わってドイツがギリシヤに進撃）。

他方，こんな話題も登場する。《私が上海にきたばかりの頃は，丁度パリがおちるとかおちないとか，世界中の新聞がさわいでいたといよ，私，友達の支那人と街を歩いてゐたら，道端の花屋の前でフランスの兵隊が四五人あつまつて，そのなかのひとりが女にでも贈るらしい花束をつくらせるのを，ほかの兵隊が大さわぎしながら助勢してゐたの，私，それをみて，『随分呑気ね，自分の国の首都がもう陥落すると云ふのに，』と云つたわ》（p. 100）と。

こうして上海の日本人は，さまざまな国籍を有する人々を，世界戦争における戦況と見比べながら観察しつづけていた。

要するにフランス兵は，このフランス兵の姿を見ながら，《上海からぢや，パリまで鉄砲はとどかないでせう》などと口にした《支那人》ともども，日本人からすれば，なんとも《愛国心のない奴だ》（p. 101）という受け止めになってしまうのだった。

女性が男を見るときに，はたして男の体現する「愛国心」がその尺度となりうるのかどうか，池田みち子はそこを敢えて自分に問おうとはしないが，その上海探訪が面白いのは，主人公がひき寄せられるのが,「愛国心」によって上げ底されたような男たちではなく，どちらかといえば，国家という後ろ盾を持たない無国籍者の方だったからである。

Saturday

すでに『上海メモラビリア』をとりあげた際，「上海で〔補注：中国人の妻と〕結婚して家庭を持ち，漢字を覚え」て，「一九五二年，最後のユダヤ人たちとともに上海を離れて妻と日本に渡り，日本で七年間，アメリカで三年間生活し，その後故国オーストリアに戻った」というター

ナー（杜爾納）氏なる人物のことに触れた。

じつは，日本語作家，リービ英雄（1950-　）の父親は，「ターナー氏」と同じくドイツ・東欧系のユダヤ系だが，米国生まれ（ターナー氏はオーストリア人）で，《ブルックリンで厳粛なユダヤ正教の教育を受けた》にもかかわらず，外交官となって《革命寸前の上海領事館で初めての外交官職に就いてから二十年近く，一度もユダヤ寺院（シナゴッグ）に足を踏み入れたこともない》らしいと，彼は《母から聞いていた》。しかも，まさに《ウェスト・バージニア出身でポーランド系のカトリックの女》だった，その母と《結婚したのはかろうじて認められた》ものの，その母とは《十年後に離婚し，しかも再婚したのが二十歳若い中国人だったこと》は，父とブルックリンのユダヤ人一族との《義絶の原因となった》らしい（『星条旗の聞こえない部屋』講談社，1992，p. 28）。ユダヤ人の男性は，「異教徒（シク）の女性（セー）」に魅力を感じやすいと言われ，それはユダヤ人の子どもは，ユダヤ人の母親でなければ育てられないから，いくら父親がユダヤ教徒でも，結婚相手が異教徒なら，その父親もまた背教者相当だということになる。そのタブー感が「シクセー・コンプレックス」につながるということなのだが，「ターナー氏」の場合には一度で終わった「異教徒女性との結婚」を，リービの父親は，二度，段階的にくり返したわけだ。

しかも，主人公のベンは，その「ポーランド系のカトリックの女」の子として生まれたので，見た目は「ハーフ」ではなく，純粋な「白人」で，にもかかわらず，父の何カ所目かの赴任地だった台湾で，家庭の崩壊を経験し，《母と二人で基隆（キールン）からプレジデント・ウィルソン号に乗って，見知らぬアメリカへ「帰」った》（p. 16）後に父は，かつて台湾時代に《父から〔中略〕「姐々（ジェジェ）」と北京語で呼ぶように言われていた》（p. 15）中国人女性とのあいだに弟（＝ジェフリー）をこしらえて，たまたま日本の横浜の領事館につとめていた。『星条旗の聞こえない部屋』は，「扶養家族訪問者（ディペンデント・ヴィジター）」として，父を訪ねてきた《十七歳》の青年が，日本に最初の一歩を踏み出すという物語である（《サンフランシスコからプレジデント・ルーズベルト号に乗って，ホノルル経由で横浜に来た》――p. 23）。

《幼児の頃から香港，プノムペン，台北など，数年あるいは数カ月ごとに家と国を替えながら，アジアの中に住む白人の子供として育った》彼は，《多勢の人の眼差しの中で育》たねばならず，《市場の狭い小路を歩いていると，かならず付きまとってくる同い年の裸足の子供たちから「美国」とたたえられ「白鬼」と貶された》（p. 10）という。

これが上海であれば，また違っていたのかもしれないが，リービは，そうした「眼差し」が大っぴらに宿っている空間としてアジアを認識している。そして，「十七歳」の日本でも，そんなアジアとしての日本を（今度は「アジア人の継母」と「ハーフ」の弟とともに）経験することになる。

かりに「白人が書く文学」を「ホワイト・ライティング」と呼ぶなら，リービの文学は「日本語で書かれたホワイト・ライティング」そのものなのである。

そして，白人の父親が，中国人の若い女性によって奪われていく（生みの母が夫から捨てられる）感覚を味わわされた土地としての台湾が，主人公にとっては，原風景であり，最初の小説『星条旗の聞こえない部屋』の原風景であるということは，リービ英雄という作家の文学的原風景のひとつでもあったと言えるのだろう。

《台湾海峡の鮮やかなオレンジ色の夕焼け空の前で，誰も喋べっていなかった。／風よけガラ

スを通って差しこんだ陽光が眩しかった。運転席にいる父の薄い頭髪を汗がさらに薄めるのを，ベンは見守った。／父はベンの知らない言語で囁きはじめた。中国語の方言だったのだろう。未知の音節と抑揚に伴って，父の腕は隣の座席にいる女の方へやさしく動きだした。熱帯植物の大きな葉のように，ゆっくりと確かな動きだった。》（p. 15）

この「ベンの知らない言語」というのが,「継母の言葉」としての上海語であったらしいのだが,「上海での熱い思い出」と不可分に結びついた上海語を「親密性の言語」として温めつづける男女が，20 世紀後半の世界には散らばっていて，リービ英雄は，そうした上海語の記憶を，日本語で書き留めようとした西洋人作家であったというわけだ。

日曜日の領事館周辺は,《朝から〔中略〕ラムネと金魚掬いととうもころしの露店がずらりと並び，公園の中から家族づれの日本人が大通りの両側に溢れ出てい》（pp. 25-26）る。

そこを一家は《父親を先頭に〔中略〕混雑した山下公園通りの歩道をまずホテルまで歩いて朝昼兼用〔ブランチ〕の食事をとる》のだが,《レストランはいつも教会帰りのアメリカ人家族で満席》で,《みんなが英語（中西部の濁音と南部の鼻音が多かった）で会話してい》る。そんななか,「白人」の父は，新しい妻と《上海語で話し》，そこだけが浮いているのだ。

横浜の治外法権空間では英語が公用語なのに，主人公の父と継母のみが，さらに「治外法権」を生きている。

「台湾海峡の鮮やかなオレンジ色の夕焼け空の前」がそうであったように，横浜のレストランの一卓もまた「治外法権」の場所だった。

そして,『星条旗の聞こえない部屋』の主人公は，そこから日本語しか聞こえない世界へと逃亡を図るのだが，時は 1960 年代の終わり。《外人》――《オーカエレカエレ》の声を浴びせかけられて, 主人公は《自分にはもう「帰る」ところがないことをはじめて悟った》（p. 84）のだった。

そのときが「はじめて」だったとしたら，同じ思いはそれからも幾度となく彼の下に回帰したということだろう。

ラフカディオ・ハーン（1850-1904）からリービ英雄まで。

そういえば,『星条旗の聞こえない部屋』のベンの《父の書斎には，明治時代に印刷された英訳『論語』》などに混じって,《「小泉八雲全集」》（p. 14）もあったという。こちらは「英訳」ではなく，ホートン・ミフリン版の 16 巻本の著作集（*The Writings of Lafcadio Hearn: in sixteen volume*, 1922）だろう。

Tuesday

先の大戦における日本の敗戦前後の上海を描いた小説のなかで，異色の作品として知られるのが，大城立裕（1925-　）の『朝，上海に立ちつくす／小説東亜同文書院』である。『カクテル・パーティー』（1967）で東京文壇に衝撃を与えた大城は，あくまでも「沖縄の作家」「琉球作家」としての立ち位置に徹し,「日本語圏」や「英語圏」のみならず,「中国語圏」が脈々と受け継いできている「公論」の場というものに対して，さまざまな位置取りでのアプローチを試みている作家である。それは「日本語」と「琉球語」という非対称な対立関係のなかで構想された「沖

縄文学」ではない。沖縄における米兵による性犯罪を扱った『カクテル・パーティー』でさえもが，そこでは「中国語」に重要な役割があてがわれているのであり，こうした特徴は，大城が，上海の東亜同文書院の予科に通っていたことと無関係ではないのだ。

そこでは，北京官話以外に上海語，そして英語の授業があり，そこで培われた言語的センスが，大城の場合，米軍占領下の沖縄での作家修行に大きく役立ったということでもあるように思う。

というより，『カクテル・パーティー』で文壇に登場した大城は，『朝，上海に立ちつくす』によって，みずからの原点を確かめたと言うべきなのかもしれない。

故郷，沖縄の那覇に，恋人の新垣幸子を置いて，上海への留学に旅立った主人公の知名雅行は，先の見えない戦争のさなか，折々の「自慰」で，どうにかみずからを慰めている。

ところが，1944年の《十月十日に那覇市に米軍機の大空襲があって全市が焼尽》し，《新垣家の人たち》は《避難中に直撃弾をくらって一家全滅した》（『大城立裕全集⑦』勉誠出版，2002，pp. 243-4）との便りが届く。

そんななか，東亜同文書院の学生たちも勉強どころではなくなり，入営の日が近づいてくるのだが，そんななか，知名は，親しくしていた范淑英という女性から《「琉球人が日本の兵隊になるなんて考えられない」》と不意を討たれる。それまで沖縄出身者としての自覚はあっても，「朝鮮人」や「台湾人」ほどにも「日本人ではない」という自覚を持つことのなかった知名は，《咄嗟に「好人不当兵（ハオレンブタンビン）」（よい人は兵隊にならない）という俚諺》を《思いだ》すのだが，《自分にたいする好意のあらわれだ》と，この言葉を受け取った彼に対して，女性はさらに《「あなたを拉致したい」》というせっぱつまった言葉をつきつけてくるのだ。

そして，《プラタナスの落葉した枝に〔中略〕若芽が気はずかしげに萌え出ている》春先の夜，フランス租界から寄宿舎への帰路を急いでいるところに，《「同文書院の学生さん？」》と，日本語で呼び止められ，《まちがいなく日本人の男の声だが，女のようにやさしかった。》（p. 262）

そして，中国女性，范淑英のせっぱつまった声に高揚させられ，郷里の恋人の詩に対する絶望からも抜け出せずにいた知名は，男の誘惑に屈してしまう。

《知名は身を固くし，そこからもう逃れようのないことを予感》すると，あとは相手の技に身をゆだねて，《身体一杯に恥をみたして果てた》のだった。日頃。自慰にふけるときの妄想が，射精を促した。

そして，その後は，男が《自分も果てたがり，知名の手をかりた》のだった。

この昂ぶったプロセスのなかで，最初に《范淑英の顔が浮かんだ》。そして《（好人不当兵）／彼女が逝ったような気がした》のだが，《（幸子……）／男が果てたとき，胸のなかで呟いた名前はそれだった。》

過剰なまでに，みずからを恥じる知名は，《上海のフランス租界野郎に辱められた自分に合わずに，アメリカの空襲に死んだ幸子は，むしろ幸せであったのかも知れない》とまで思いつめ，他方，《范淑英に再会する資格を，得ることはできるだろうか》（p. 264）と，わずかな希望にすがる。

『カクテル・パーティー』を書きながら，みずからの娘が米兵の性的暴行を受けるエピソードを書きながら，同時に，報復的に米国人女性（ミセス・ミラー）の《豊満な肉体》に欲情をいだく自分自身を語り，さらに妻が《日本の兵隊に〔中略〕犯され》た過去を打ち明ける中国人（＝

孫氏）をも登場させる。

同じ性的妄想でも，それが妄想と射精だけで終わるか，性暴力の完遂の形をとるかでは雲泥の差だ。しかし，その両者が「地続き」であることに大城は自覚的だ。

そして，こうした際どい主題を「言語と言語の壁を越えた現象」としてとりあげ，それこそ妄想自体が，多言語的な音響性をともなってしまう現場を，彼は小説のなかで再現しようとしたのだ。

Thursday

アジア太平洋戦争で日本内地への空襲が始まるのは，1944 年 6 月 15 日の八幡空襲が最初（それ以前にも南鳥島や台湾の新竹空襲などはあった）だが，10 月 10 日の那覇空襲は，市内だけで 255 名の死亡者が出て，大城立裕の『朝，上海に立ちつくす／小説東亜同文書院』（1983）で，主人公の知名が，恋人の幸子を失うのは，この空襲でのことだった。八幡に爆弾を投下したのは，中国奥地の成都から出撃した B29 だったが，那覇空襲は太平洋上の米軍艦載機による攻撃だった。

そして，恋人の死を知らせる《一通の葉書》（p. 243）を受け取ったのは，当時，日本軍制圧地区最前線の江蘇省揚州で，学徒動員の一種で，《中共の新聞の翻訳をやらないか》（p. 232）という話がとびこんできたのだ。秋の新学期早々，上海港の《三菱造船所》で《ロープ造り》やら《製鋲》（p. 231）やらに駆り出されるよりは，東亜同文書院で身に着けた中国語の知識が活かせる。街に出てしまうと，書院生の中国語能力では理解が難しい中国語の方言が流通しているのだが，翻訳ならば支障がなかった。そして，そんな《揚州の空》にも《B29 の編隊が飛ぶように》（p. 243）なったころに，知名は沖縄からの「葉書」を受け取ったのだった。

揚州に派遣された書院生は，《知名と織田，金井，梁》の四人で，《出身地でいうと，沖縄，東京，朝鮮，台湾》（p. 234）と，それぞれだった。そもそも日本軍の徴兵制度（1873 年に徴兵制度が発足）は，帝国の日本の拡張とともに，適用範囲が，本州・四国・九州から，北海道・沖縄県（1898 年以降），そして戦争末期には，植民地朝鮮や台湾でも，志願兵制度の導入に続き，1944 年には徴兵制が施行され，じつは上海東亜同文書院の面々も，翌年には「学徒動員」に応じることになるだろうという空気のなかを生きていた。

そうしたなかで，1943 年予科入学組の金井恒明から，知名は《「沖縄県人は独立運動をやっているか」》（p. 191）と，予想もしない質問をぶつけられたことがあった。「軍米収買」のために赴いた農村で，銃の「暴発」を起こしたことのある金井に対しては，この暴発事件で負傷したのが，日本人の織田だったことをとりあげて，日本の憲兵隊のあいだでは，《織田君の徴兵検査を不可能にする》（p. 185）ための陰謀ではないかという猜疑心を日本人のあいだに真似させようとしていたのだった。そういったなかで，金井は，みずからも含めて，知名に対しても《徴兵忌避》（p. 191）という選択肢がありうることを突き付けてきたのだった。

そして，そんななか上海に戻って受けることになった《徴兵検査の結果は織田と知名が第一乙種合格で金井だけが甲種合格》（p. 251）となるのだが，台湾出身の梁勝雄は，《上海へ帰ることになっていた》朝（《初雪が降った》），《中共地区へ消えた》（p. 249）のだった。

そして，上海に戻るべく，揚子江を渡る「発動機船」のなかで，ふり返った会話があった――《一か月ほど前のことであったか，酒を飲みまわしたときに，金井が朝鮮独立論を持ち出すと，梁が「台湾も独立するよ」と相槌を打った。金井は酒の勢いも手伝ってか，せせら笑った。「人口たかだか一千万で，台湾が独立できるものか。朝鮮の人口は三千万いるんだぞ」》。

その光景を思い浮かべながら，知名は《金井と違って消極的，平穏な感じであった梁が，金井の先を行ってしまった》と感じ，《金井は劣等感を抱いているかもしれない》（p. 251）と思う。

青春の盛りの彼らのあいだには，異性関係をめぐる男同士の友情や競争関係があった。そんななかで，金井のなかに「分身」的な何かを感じるようになっていた知名は，煩悶の泥沼に巻きこまれてゆく。

1944年の夏季休暇に金井は，陸路，故郷の朝鮮に帰り，知名は家庭教師の代理をつとめたりしていたのだが，その家庭教師先の娘，荻島多恵子は，金井とのあいだに関係があるらしく，知名は，どうしてもその多恵子の前ではおどおどしてしまう。《「こんど朝鮮に帰ったら，もう来ないかもしれない，と仰有っていました」》（p. 227）と寂しそうに話す多恵子に向かって，《「戻ってきますよ」》と気休めを口にした日，知名は《ガーデン・ブリッジを電車で渡りながら》物思いにふける。《下を流れる蘇州河の川上に，中央郵便局の時計台が見え〔中略〕河には戎克（ジャンク）船や舢板（サンパン）が群れている。マンションには外国人も多かろうが，中国人もいるだろう。マンションに住んで富む人も河に住んで貧しい人も，このさいはひとしく知名からはるかに離れた場所にいた。／突然，ひとつの想念がわいた。／（あのなかに朝鮮人がいるだろうか……）》（p. 228）

知名は，梁勝雄の背後に中国語の一方言である閩南語の響きを思い浮かべることはあったかもしれないが，彼のことは「中国人」か「台湾人」か，そのいずれかでしかないと感じていただろう。しかし，彼は金井恒明のなかに，自分に対して「琉球人」であれと挑発を加えてくる「朝鮮人愛国者」の存在を見ないではおれなかった。

そして，その金井が，韓国＝朝鮮語という，知名にとっては「異言語」でしかない言語によって結びついた，もうひとつの民族集団に属していることを，知名は無視できなかった。

大城が『ノロエステ鉄道』（1989）のなかで描くことになった「徴兵忌避者」というテーマ，そして『小説琉球処分』（1968）の段階ですでに視野に入れていたのを，『さらば福州琉球館』（1994）によってさらに膨らませた琉球人亡命者といったテーマ，これらの発端は，その上海経験にまで遡るということのようだ。

Sunday

『朝，上海に立ちつくす／小説東亜同文書院』を収めた『大城立裕全集⑦』には，「著者のおぼえがき」として「「他者」ということ」という一文が付されている。そのなかで大城は，小説の背景をふり返りながら，こう書いている――東亜同文書院の《学友に台湾出身者が二人いて，作品〔＝『朝，上海に立ちつくす』〕の「梁」は，二人のモデルを折衷している。いま，一人は北京に，一人は上海にいる。片方の「梁」は，作品に書いたように揚州から中共地区へ脱走したが，その理想を裏切られてスパイと見られ，終戦まで軟禁されたという。他の「梁」は文革のときに「同文書院」出身者という理由で迫害を受けたという。両者ともに，いま日中の架け

橋としての相当な業績をあげている》（p. 407）と。

台湾出身の華人二人は，歴史の紆余曲折を生き延びて，中華人民共和国の発展にそれなりに貢献できたということのようで，しかも，その足跡は「折衷」しても差し障りのない，一個のマスターナラティブに収束するようなものだったようだ。

しかし，同じ『朝，上海に立ちつくす』には，何人もの朝鮮人が登場する。何といっても大きな存在感を示すのは，日本軍兵士として従軍もし，日本人を恋人にもしていながら，日本の敗戦＝朝鮮半島の「光復」後，姿を消してしまった金井恒明である。

それこそ，1943 年の 12 月に，《学徒出陣の壮行会》で，日本人の出征兵士に向かって《「俺はそのように感激できる諸君が羨ましいッ！」》と叫んだ《朝鮮出身の高山》（p. 194）や，《朝鮮人の連盟本部には〔＝大韓民国〕国旗が掲げてあるそうだ》と，かねてから話していた《幸田》（p. 267）という書院生もいれば，逆に《「上海の在留邦人に朝鮮人の組織があるでしょう」》と水を向けても《「あるでしょうね」》と答えるきりで，なかなか話が噛み合わない，《高野》（p. 289）という名の半島出身者（慶州生れの軍属だったという）も登場する。大城のなかで，台湾出身は別として，朝鮮半島出身者は「折衷」することが難しい「多様さ」という特徴を有していたようだ。

しかも，金九（1876-1949）をはじめ，上海の朝鮮人（＝韓国人）の一部は，「光復」後，「大韓民国」の発展を目指したが，同じ亡命政権の面々のなかでも左派に属した金元鳳（1898-1958）のように，国民党傘下で「光復軍」として抗日戦争を闘ったものの，「光復」後は，金九らとは袂を分かって越北した者もいた。

また，すでに日中戦争のさなか，満洲では金日成（1912-94）らが虎視眈々と解放の瞬間を狙っていたし，同じく毛沢東（1893-1976）の指揮下，1942 年 7 月には山西省太原で朝鮮義勇軍が結成され，これが後に，朝鮮民主主義人民共和国で「延安派」を形成することになる。作家，金史良（1914-50）が戦争末期に日本軍の封鎖線を突破して合流したのは，この「延安派」に属する華北朝鮮独立同盟の拠点だった。

そういったなか，ことあるごとに「朝鮮独立」の夢を語っていた金井が，祖国の「光復」後，どのような身の振り方を選んだのか，小説は，彼が日本人の恋人（＝荻島多恵子）を棄てたこと以外，具体的には語らない（《「どこへ行ったのでしょう」／「分からぬ。皆目見当がつかぬ」／「朝鮮か重慶か延安か……」》――p. 296）。

この小説には，金井の「分身」とも言える和田少将という《朝鮮出身の国府軍少将》（p. 247）の姿もまた描かれている。《日本語は普通の朝鮮知識人なみだが，中国語も江蘇省訛りで流暢》なのが，主人公らには驚きだったのだが，もっと驚かされたのは，彼が日本軍の《工作員》であるばかりか，《中共側の工作員でもある可能性がある》という噂までが飛び交っていたのだ。この謎の人物のことを，金井は《僕が聞いているのは，和田さんが十七歳のときに朝鮮独立運動を志してここまでやってきたということだけだ》（p. 248）と話したことがある。

そして，戦後，和田に関しては《「朝鮮へ帰ったそうだ」》（p. 266）という噂が流れるのだが，金井の行方は杳として知れない。

先に触れた大城自身が書いた解題（「「他者」ということ」）には，《一九六六年に勤めの公用出張で韓国へ行く機会があったが，それに期待したのは，ついでに同文書院時代の学友に会う

ことであった。三人いたが，いちばん会いたかったのは〔中略〕「金井恒明」である。北朝鮮で労働党にはいったと伝えられたが，死んだらしい》（p. 407）とある。

大城は，そうした「金井」のその後を知った上で，しかし，小説はあくまでもオープンエンディングで終わらせている。

沖縄戦後の実家の状況も分からないまま，上海の他の「日僑」らと同じく《考えようもないところで安堵している》（p. 267）知名は，《上海から直接沖縄に渡ることは，戦前と同じく今も不可能》である以上，《一応日本へ帰って》から考えるしかないのだった。和田少佐の場合，「朝鮮へ帰る」ことに支障がないのは，さしあたり《朝鮮は独立したから》（p. 278）だったが，沖縄は「独立」どころか，内地同様に米軍の占領下にあった。それが夢物語にすぎなかったとしても，《欧米の侵略から中国を守らねばならぬ。中国を救わなければ日本も危い》（p. 190）との日本版「アジア主義」を叩きこまれてきた元･同文書院生にとって，「帰郷」が心躍るものであったとは考えられない。要するに，主人公の「知名」にさえ，どんな未来が待っているのかは分からないように小説は書かれている。

一人一人の人生は，分かれ道をひとつひとつ歩く以外になく，後戻りがきかないのだが，小説の登場人物たちは，かならずしもそうではない。

「金井」も「知名」もそれぞれの戦後を生きながら，場合によっては，日本で，あるいは中国で，場合によっては韓国か北朝鮮，さらには米国かブラジルあたりで再会できたかもしれないのだ。

Wednesday

『カクテル・パーティー』は，大城立裕にとって文字通りの出世作だが，前に触れた『朝，上海に立ちつくす』への「おぼえがき」の次の一節は，ある意味，作家・大城立裕の原点とも言えるトラウマ的な体験を語ったものだと分かる。

> はじめて上海〔の東亜同文書院〕へむかう船のなかで，学友の一人から「沖縄ならシナ御が上手でしょうな」と言われて，ショックだった。いまなら笑ってすませる話だが，当時はそうはいかなかった。〔書院の〕予科で学んだ地理の教科書は，中国の中学校の教科書を援用していたが，そのなかの一項目に「中国の失われた領土」とあり，そこに「琉球」がはいっていた。（p. 408）

『カクテル・パーティー』は，1960年代（本土復帰前）の沖縄を舞台に，《日本人とアメリカ人ばかりの土地で中国語を話すグループ》（岩波現代文庫版，2011，p. 151）が「国際親善」を掲げてくりひろげる《チー・ウエイ・チュー・ホエ》（＝鶏尾酒会の中国語読み，p. 150）が，メンバーの一人，米国人のミラー氏が，英語しかできない米国人に声をかけて企画した「カクテル・パーティー」の場面から始まる。

本来のメンバーは，そのミスター･ミラーと，《中共の支配する大陸から香港へ亡命した〔中略〕一人》（p. 158）という孫氏，そして《N県》（p. 151）から来た新聞記者の小川氏，そして沖縄の主人公（＝「私／お前」の四人だが，その日の会は，ミセス・ミラーや，その他，中国語の

通じないゲストが少なくなかったから，おのずから英語が公用語になっていて，しかし，《いつのまにか二人だけ日本語でしゃばっている》（p. 161）のに小川氏と主人公がバツの悪い思いをしたりもして，ともかく小説は日本語だけで書かれてはいるが，もしも映画にでもするならば，三言語が入れ替わる作りにしないとリアリティが出ない作りになっている。

『朝，上海に立ちつくす』には，《沖縄，東京，朝鮮，台湾》（p. 234）から来た書院の同級生が，江蘇省揚州に動員される箇所があるが，鈴木直子さんの『カクテル・パーティー』論（＝「大城立裕におけるアイデンティティと言語――二つの「カクテル・パーティー」をめぐって――」）を覗いてみたら，《「カクテル・パーティー」での立場の異なる人物たちの織りなす四角形の構図は，まさに大城自身が戦時下に体験した時代だった》（『総合文化研究所年報』第21号，2013，p. 39）との指摘があり，深く納得させられた。

『カクテル・パーティー』の四人も，大城が『朝，上海に立ちつくす』のなかでクローズアップした四人も，背負った民族的バックグラウンドはさることながら，身に着けた言語的素養も異なっていた。ただ，上海の東亜同文書院を描いた『朝，上海に立ちつくす』の四人は，最低限，日中バイリンガルではあるのだが，通常は「支配者の言語」である日本語で会話を進めていて，琉球語や朝鮮語を口にする機会はあまりないし，日本語の出来ない現地中国人があらわれないかぎり，中国語を披露することもない。それが「占領者」が敷いた秩序なのだった。それに対して，『カクテル・パーティー』においては，言語が乱立している。小説は日本語で書かれているのだが，日本語が支配言語となることはなく，英語と中国語がせめぎあう形で，議論が進む。そんななかで，《中国語で本土とか内地とかヤマトとかいう概念を翻訳するのが難しく，日本とよんだことにひっかかるもの》を《感じ》（p. 165）ないではおれないのが，主人公だ。

岩波現代文庫版の『カクテル・パーティー』には，1995年作の『戯曲　カクテル・パーティー』が併録されているが，この作品の極意である政治的な緊張感は，1963年に実際に会ったレイプ事件や，それを取り巻く日米地位協定の問題といった物語的な背景によって産み出されるだけではなく，アジア太平洋戦争の時代から戦後にかけての「東アジア」で起きた出来事に，「沖縄，内地，中国，米国」を代表する（かのような）四人が，何語で，どう向き合えるのかというプレッシャーの強さからも生じていると言えるだろう。誰が誰に向かって，何を何語で話すかによって，その言葉が受け止められる範囲が違ってくる。この作品の妙のひとつはそこにある。

そんななかでこそ，《沖縄出身の学生がみな中国語が上手だということが『やはり…』という表現で認められ》（p. 166）てしまうという日本人からの偏見に対する違和感が，《きみは琉球人ならわれわれと同じじゃないか。なぜ日本軍の通訳などしているのだ……》（p. 155）という中国人側からの一方的な注文に対する当惑と一対をなして，主人公を追い詰めていくさまが見てとれる。

しかも，その主人公自身が，《中国人はずいぶん語学に堪能ですね》と，自分から語学能力と歴史的背景の関連性についての一般論を話題にしてしまう。《上海の学院に留学していたころ，上海の庶民がいかにも日本語に巧みなことに感心した》と言うのである。そして，さらに《日本が進出する前は英語をよく使っていたそうですね。終戦後もそうだった》（p. 164）と。

そして，そこで口が滑ったことに気づいたのか，その後，《それにくらべると沖縄人はなんと英語が下手なんだろう》と，話を逸らす。しかも，話を逸らすきっかけになったのは，かつて

学院の《日本人学友のひとりが言った》のだという《亡国の民が本能的に身につけた技術》（p. 165）という，それこそかつては主人公自身に向けられた言葉だった。

それこそ「亡国の民」としての沖縄人は「英語が上手だ」という，いかにも内地人一言語使用者にありがちな上から目線に，機先を制して照れてみせたのが，「沖縄人はなんと英語が下手なんだろう」という社交辞令だった。

しかも，この謙遜の言葉は，中国人の孫氏に向けられていて，この言葉は中国語で発せられているのだ。まるで，戦争に負けても「亡国の民」とはならずにすんだとの自負に裏打ちされた，内地日本人くさい謙遜が，主人公に乗り移ったかのような場面なのだが，『カクテル・パーティー』という小説のスリルは，こうした沖縄人主人公のアイデンティティの「ゆらぎ」，そして言語的な「ゆらぎ」にこそ宿っている。